

特集1

植田和弘教授退職記念公開シンポジウム

開会あいさつ

皆さま、おはようございます。ただいまご紹介いただきました、徳賀でございます。植田和弘先生の退職記念シンポジウムの開催を心よりお喜び申し上げます。

さて、植田先生とのお付き合いは、わたくしが京都大学に赴任致しました2002年のころからございました。同じ8階の研究室でしたので、エレベーター前の立ち話等で、「会計学では、この問題をどのように考えるのか」という質問をされまして、お答えしたことが2、3度あったと記憶致しております。

そのような隣人的なお付き合いが密なものに変わりましたのは、2012年に植田先生が経済学研究科長・経済学部長に選出されて以後でございます。わたくしは、ちょうど同じ時期に経営管理研究部長・教育部長を命ぜられまして、植田先生の研究科長時代の2年間、全学の会議や東京での京大のイベント等で頻繁にお会いするようになりました。

当時、経済学研究科長の植田先生、公共政策大学院長の岡田先生、経済研究所長の溝端先生、それにわたくしと、4つの部局の長がいずれも経済系でした。皆さまもご存じかもしれませんが、経営管理大学院は経済と工学、公共政策大学院は法学と経済のメンバーから構成されていますので、4つの部局の長がいずれも経済系であったというのは、これまでのところこの時だけだったと思います。植田先生は、経済系のリーダーとして、われわれの意見をうまく纏められて、本部の会議等で発言をしておられました。

2011年3月11日の東日本大震災、東電の原発事故の後の時期でしたので、植田先生は、研究科長の重責を担われながら同時に、国や地方自治体のエネルギー問題の会議やマスコミ等で意見を発信され、非常に多忙な日々を送っておられました。

2014年の3月ごろに、植田先生と、「ようやく管理職から解放されますね」

というお話をしたすぐ後に（そのように感じましたが、実際には半年後です）、植田先生が大学基金と同窓会担当の副学長となりました。わたくしには財務担当の理事補をしてほしいという話がございます、仕事の内容が植田先生のお手伝いをするということでしたので、喜んでお引き受け致しました。

2014年の10月から2015年の4月までの約半年、一緒に仕事をさせていただきました。大学基金も同窓会も本部の渉外課というところが所管なのですが、植田先生のお仕事ぶり（企画されること）はPDCAが非常に明確でした。また、先生の温かいお人柄から事務サイドとの意思疎通も非常にうまくいっておりまして、素晴らしいリーダーシップを執っておられたと、今でも敬服致しております。

その間、いろんな仕事を一緒にさせていただきました。植田先生は、一見荒唐無稽な提案であっても、いつも「それは面白い。できるかできないか分からないけれども、検討する価値はある」と言われます。それがうれしくて、わたくしはいろんな提案をしまい、結果として植田先生の仕事を増やしてしまいました。今では大変申し訳なく思っております。

ルーティーン・ワーク以外で例を挙げれば、一緒に京大に提案したプロジェクトがございました。1つは、京大ソーラー化計画でございまして、もう1つは、民間の資本による体育館の再建計画でございました。前者は、京大の屋上全てをソーラー化するという計画でございまして。後者は、室内プールのない京大に、民間の資金を利用して温水プール付きの体育館を建て直し、一部を民間のジムに提供する代わりに、維持費と管理費を当該民間に負担してもらおうという計画でございました。

ソーラー関係企業の人と一緒に経済学部や法学部の屋上に上がり、どのくらいの大きさのパネルを置くことができるのか、どのくらいの電力を生むことができるのかについて一緒に見積りをしたこともございました。また、スポーツジム、プール等を運営する民間企業に相談にあげました。しかし本部の最終的な判断は、前者は、「コストパフォーマンスがとんとんなので、投資は尚早である」と。後者につきましては、「体育館に耐震工事をしたばかりなので、建て替えはもったいない」という結論でございました。二人で非常に残念に思ったことが思い出されます。大学の組織では、何か新しいことをするには非常に大きなエネルギーを必要とすることがよく分かりました。

実は、この2つの企画につきましては、わたくしはその後も懲りずに検討を続けておりまして、現在の実現可能性は、わたくしの推察ですけれども、結構あると思っております。一つでも実現しました暁には一番に植田先生にご報告に行くつもりです。

2015年5月から植田先生のお仕事の代行を務め、その年の10月から副学長を命ぜられました。いつ植田先生が復帰されてもよいように、また滞

りなくバトンを返せるようにと考えながら仕事をしてまいりました。昨年末に、この3月にご退職ということを知り、とても残念に思いますと同時に、植田先生が手掛けてこられたプロジェクトを引き継いで完成させたいと決意を新たに致しました。

ご退職後もお元気でお過ごしいただきますよう、心からお祈り致します。ご静聴、ありがとうございました。

徳賀芳弘(京都大学)